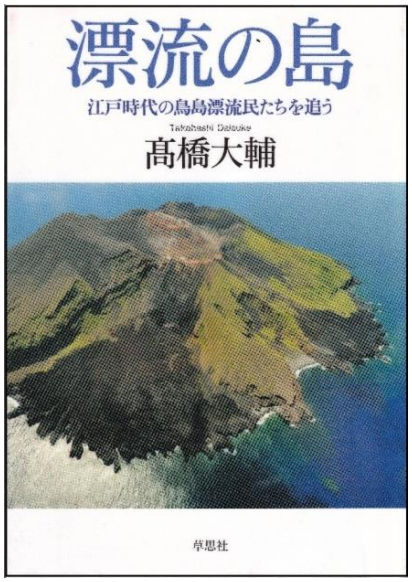
『漂流の島～江戸時代の鳥島漂流民たちを追う』（高橋大輔著）



この地球上、世界の隅々に至るまで探検し尽くされて、最早探検だの空白地帯だの秘境だのと言われる言葉は死語になってしまった。

登山の世界でも未踏峰のジャイアントが全て登頂され、後はチマチマとした登路のバリエーションを“開拓”したり、登頂の速さやスタイルを競ったりするしか能が無くなっているのと同様に、探検の世界でもかっての地図の空白地帯を探検して世に紹介するなどという探検は、南極北極探検やアラスカ北西航路開拓のアムンゼン、「さまよえる湖」のスヴェン・ヘディンなどの時代で終わり、後はリヤカーを引っ張って大陸横断したり、ロングトレイル世界一周などというようなトピックスしか残っていないらしい。

しかし、この本を読んでから“探検”という世界にはまだまだ従来の探検行とは異なる貴重な鉱脈が残されていることを知らされた。このことについては後で触れることにして、今回はその腰巻評論に騙されて（？）読んだ“探検記”を紹介したい。その腰巻評論に曰く「江戸時代、江戸から南へ約 600 キロの絶海の孤島、鳥島に、日本人漂流民が続々と流れ着いた。この絶海の孤島での壮絶なサバイバルと奇跡の生還劇に迫る！」。山の本ではないので紹介に気が引けるが、コロナ下の暇潰しにでもお読みください。

噴火口だけが大海原から顔を出しているような火山礫だけの不毛な絶海の無人島・鳥島に漂着した漂流遭難は、記録に残っているだけでも 17 世紀から 19 世紀までの 2 百年間に 13 例があり、その中にはアホウドリを喰いながら 12 年間も生き延びて流木で舟を作って生還した土佐の水主・長平や、19 年間も閉じ込められていた間に 12 人居た仲間が次々に亡くなって 3 人になった末に後に漂着した他の難破船をやはり流木で修理して生還した遠州の廻船など、筆舌に尽くしがたい苦労の上の生還劇があった。

これらの鳥島漂流譚は、吉村昭『漂流』、織田作之助『漂流』や井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』などの文学作品にも描かれているので皆さんもご存じのとうりであるが、鳥島は今でも不毛の無人島でアホウドリ保護のために天然保護区域に指定されていて上陸が禁止されている直径僅か 3km にも満たない小さな孤島であり、世間から忘れ去られた場所であることに変わりはない。

さて、本書の著者は南米チリの小さな島を探検して「ロビンソン・クルーソー」のモデルになった漂着民の住居跡を世界で初めて発見し、ナショナル・ジェオグラフィック誌にその探検記を掲載した人物で海外では探検家として名があるらしいが、日本では殆ど無名であるようだ。その著者がなぜ世間から忘れ去られた鳥島という辺境の島に取り付かれたのか？　漂流譚なら前記の小説でも読めるし、また漂流からの生還者を取り調べた幕府や藩の取り調べ調書（生還者の口述調書）を紐解くこともできる。

だが、著者は言う、“ただ体力や気力だけでは、水も食糧も住居を作る木材も無い不毛な無人島の過酷な環境を生き抜いていくことはできない。彼らを生き抜かせて生還させたものは一体何だったのか？”それは、史書や小説を机上で読むだけでは分からない。彼らが実際に生きていた場所に立って、彼らの実際の生活跡から立ち昇る竈の煙のような何かを感じて初めて感得できるものであると言う。

著者は 7 年間を費やして多くの漂流民調書を仔細に考証し、明治、昭和の大噴火で埋もれてしまったかも知れない彼らの住居洞窟を地図上で同定し、苦労してアホウドリ調査団に潜りこんで鳥島に渡って、

地図上で同定した二つの洞窟を実地に探し出して、この洞窟の様子から漂着の時代は異なっていても漂民それぞれが同じこれらの洞窟に生活して過去の漂流者から精神的にも物質的にも生き抜く力を貰っていたに相違ないと考えた。その貰った力は信仰の力でもあったろうと言う。

史料によれば、漂着民の中には病気で絶命した人が多いが、絶望の余り入水したり岩角に己の頭を叩き付けたり、生きたままで穴に埋めて貰ったりして我が生を断った者も多いらしい。或る時、沖の遠くを帆船が通過しているのを発見した漂民達が声を限りに救助を求めたが、その声は船には届かず、「魂ハセメテ、アノ船ニ乗ラン」と絶叫して崖から海に身を投げた例もあるという。命を絶ってせめて魂だけでもいいからあの船に乗って帰りたいという悲痛な叫びだったのであろう。

鳥島で漂着民が生活したと思われる洞窟を実見した著者はまた言う。「二つの洞窟は今も鳥島にある。遥か580km北方にある日本本土に向かい、ひっそりと海を望んでいる。それは鳥島で生き抜いた人間の不屈の精神のありようを裏付ける確かな物証に違いない」と。

鳥島は、漂着民だけでなく、明治時代に入ってからは開拓団が入植したり、大平洋戦争時に軍隊が駐留したり、気象観測員が常駐したりした。今はアホウドリだけの無人島に戻っているが、それらの鳥島の歴史は漂着民の生活史や精神史も併せて後世に残すべき一連の鳥島の歴史として保存されるべきであろうし、また洞窟などの漂着民の生活跡なども歴史の遺跡として保存されるべきであろう。

本稿の冒頭で、“探検”という世界にはまだまだ貴重な鉱脈が残されていると書いたが、それは世界の大冒険などではなくても、我が国の島嶼部や辺境などの今は歴史の闇に埋もれてしまってどこかに消え去った史実を掘り起こして蘇がえらせるという“探検”もあるのではないかということである。

カバーの裏面に記されているこの本の梗概が著者の偽らざる気持ちであろう。少し長くなるが、そのまま引用する。「江戸時代、江戸から南へ六百キロの絶海の孤島、鳥島に、幾度も日本人漂流民が流れ着いた。活火山の島で、食料は海藻や貝、アホウドリ程度。この極限状況の中で彼らを支えたのが、洞窟であった。洞窟には過去、島から脱出した者たちが、鍋、釜などの生活用具や、脱出の経緯などを記した伝言を残していた。これに力を得た漂流者たちはその洞窟に住み、自身が島を脱出する際にも後の漂流者を想い、持てる限りの物資や伝言を洞窟に残したという」。

また曰く、「生きることさえ困難な鳥島で生き抜いた漂民たちは、なぜ後から来る同じ境遇の人間を救おうとしたのか。なぜそんなことができたのか。（中略）極限状態に追い詰められても人間らしく生き抜くことを忘れなかった彼らの凛とした姿。絶望のどん底に突き落とされてもなお、純粋で博愛の精神に満ちた生き方を示した漂流民たちに、私は同じ日本人として清々しく誇らしい気分を味わった」。

そのエピローグの終章。「読者の中には刊行後何十年も経ってから本書を手にする人がいるかもしれない。もしその時に鳥島への上陸の規制が解かれ、漂流民の洞窟が手つかずのまま残されていたなら、それを調査、保護してもらいたい。本書は果てしない時間の海を漂い、未来のエクスプローラーたちへと流れ着くメッセージボトルでもあってほしいと願う」。何やら涙が出てきた。

2016年　草思社刊　本体1,800円　　（酎）

（鳥島に漂着した漂民の一人ジョン万次郎が口述調書に描いた鳥島の絵。右下にJohn Mangの署名。引用出典「漂巽紀略」。本書とは関係ありません）

⇒⇒⇒